研究ノート

黒田侯爵家と地域社会

——育英事業をめぐって——

小川原正道

一、黒田長成の慶應義塾幼稚舎入学
二、藩校「修猷館」の復活と黒田家の支援
三、黒田奨学会
四、福岡への関心と絆
五、むすびに代えて——報古会と旧臣の再編成

一、黒田長成の慶應義塾幼稚舎入学

黒田長成は慶應三年五月五日（一八六七年六月七日）、のちの福岡藩第十二代藩主・黒田長知の次男として福岡城に生まれた[1]。福岡藩は五十二万石の大藩で、長成の幼名は梅次郎、幸千代であった。明治四年（一八七一）に廃藩置県に伴って上京し[2]、十年に学習院に入学、十一年九月三十日、慶應義塾幼稚舎に入学した[3]。同年、家督を相続して黒田家当主となり、十七年、大学予備門卒業とともに侯爵となっている。十八年から二十年まで英国ケンブリッジ大学に留学し、帰国後は式部官、帝室制度取調掛、貴族院議員[4]となり、二十七年に貴族院副議長となると、以後三十一年間にわたって同職を務めることとなる。大正十三年（一九二四）、枢密顧問官に任命され、昭和十四年（一九三九）

八月十四日に死去した。[5] この間、大正五年に刊行された『九州の現在及将来』は、「元来の謹厳なる長者の風は、益々人の仰ぐ処となつてゐる」と評している。[6]

長成の祖父・長溥（福岡藩第十一代藩主）は長成の教育に意を払い、福澤諭吉と協議して義塾に入学することになったといわれている。長成が義塾に入学することになった際、黒田家側と義塾側とで協議し、福澤が次のような覚え書きを認めたという。『福澤諭吉全集』に収録されていない新資料と思われるため、ここに掲げよう。

長成様於順様四丁目の御住居に御同居の事
御両人様共和田の方え右より通ひ御稽古の事
御稽古の課は習字読書数学何れも初歩横文も傍に少しも御稽古可然都て御稽古は寛にして精神を費すよりも身体の健康へ注意緊要の事
（中略）
御両人様衣食の御世話は老婦人に任せ御稽古並に身体御運動等の事
朝夕俗務の取締は年長の御旧臣一名奥附同様の心得を以監督致し度事
御住居並に御庭等は固より華美要せざる事なれ共可成丈奇麗清潔にして且他人の出入を便利にし塾中の大人童子を論せず良友と認むる者は自由に往来致候様注意の事これが為め碁将棋或は於順様御琴の御稽古杯の事を以て面白く人の集る様に致し度事
長成様は柔術の御稽古被成度於順様は礼式の御稽古も可然哉に存候
（後略）

「和田の方」とは、慶應義塾幼稚舎のことである。右の覚え書きから、福澤が長成に、習字、読書、数学の初歩を教えつつも、身体の健康に気を遣い、柔術を習わせようとしていたのがわかる。黒田家の職務については旧臣を一名付けて補佐させ、学問に集中できる環境を用意しようとしていた。良友をつくり、囲碁や将棋などを楽しむよう配慮もした。[7] 三田の構内に特別寄宿舎が設けられ、監督附添として高橋達と村井榮が選ばれ、福澤は月に二回、黒田邸に赴いて長溥に成績を報告したという。[8]

長成が慶應義塾幼稚舎で学んだのは明治十二年九月から十三年七月にかけてで、[9] 十二年九月から十二月までの成績をみると、出席は九十七点、算術が八十五点、漢書が七十二点、英書が七十七点、書画が七十五点、大試業が七十二

点となっている。明治十三年一月から四月までの成績は、出席九十四点、算術八十二点、漢書九十二点、英書九十一点、書画七十五点、大試業七十五点である。明治十三年五月から七月までの成績は、出席は史料の破損により不明だが、算術五十四点、漢書五十九点、英書四十九点、習字四十八点、書工四十七点、大試業〇点となっている。[10] 十三年五月以降あきらかに成績が落ちているが、長成は義塾の就学だけでは上達の見込みが立たないことを感じていたようで、モチベーションが下がっていたものと思われる。そこで黒田家では金子堅太郎（黒田長知に同行して米国に留学し、ハーバード大学を卒業）の意見を聞き、金子は福澤に長成の教育を一任するのは「旧君臣の情誼」の観点から望ましくないと回答したため、福澤に一任することをやめ、[11] 金子の進言で黒田邸内に勤学所を設け、金子が英語教授にあたることとなった。[12] その金子の提案で長成は十三年十一月に大学予備門に入り、万国歴史、語解、簿記などでは特に優秀な成績を収め、十七年七月に卒業した。[13][14]「公は頭脳緻密聡明な方で中々勉強家であつた」と、大学予備門時代を知る野中到は証言している。[15]

明治十一年頃、長溥は金子堅太郎を呼んで「長成の教育は、どうしたら、よいと思ふか」と質問し、金子は次のように答えたという。

老公は我等旧臣のものまでも洋行させて、新しい西洋の学問を勉強させて下されてゐる位である。苟くも黒田家の戸主たる長成公は、是非外国におやりにならなければならぬと存じます。私は御陰で米国に行きましたが、米国は申すまでもなく共和国であります。故に長成様には君主国の英国に御留学させられたがよいと存じますが、それには準備として第一に英語を御稽古なさる必要があります。数学は外国人に学ばれたがよい。ところが現在日本では、規則正しい英語教育をしてゐるのは、大学予備門の外はありませんから、それに入学なされ、大学予備門御卒業の上は、帝国大学に進まずに、直に洋行なさつて、ケンブリッヂ大学か、オックスフォード大学かに入つて、英国貴族教育を受けられたがよいと存じます。

こう金子が答えると、長溥はその意見を採用し、「金子に師伝の権を与へるから、長成の教育については、お前のいゝやうにやれ」と指示した。[16] 長成が大学予備門に入り、ケンブリッジ大学に留学したのは、このためであったのである。

長成は、ケンブリッジ大学では歴史を専門に学んだ。第二次大戦前までの同大学では、卒業時に受け取る学士号（B. A.）として「優等学位」と「普通学位」とがあり、後者の難易度は低く、本当に学力のある卒業生は前者を所持することになっていた。後者は「予備試験」と「一般試験」、「特別試験」に合格すると学士号が取得できた。前者は「予備試験」に加えて、最大の関門である「トライポス」と呼ばれる「卒業試験」に合格しなければならず[17]、黒田は明治二十年五月に歴史のトライポスに挑戦するも不合格となり、一般試験は免除され、十一月に法律・歴史の「特別試験」を受けて第二等級の成績で合格し「普通学位」を取得した。二十四年には修士号（M. A.）を取得している[18][19]。

二、藩校「修猷館」の復活と黒田家の支援

福岡藩・黒田家は、学問や海外事情の吸収に対し、きわめて積極的な藩であった。藩主自身が学問に取り組み、長崎で佐賀藩と交代で警備にあたり、朝鮮通信使を応接する、といった経緯から、幕末以降、藩士の長崎留学、海外留学の事業が実施された[20]。明治六年には、黒田長知が東京府に米二千石を献納し、文京区小日向に黒田小学校が設立された[21]。廃藩置県によって福岡藩校・修猷館は廃止されたが、明治十一年、黒田家の資金援助のもとで「十一学舎」と呼ばれる学校が設立され、これが成美義塾、向陽義塾などを経て[22]、明治十四年、黒田長知の援助と県の補助のもと、私学校「藤雲館」が開設、法律科、英語科、副学科を置き、学修年齢や学費などのハードルを越えられない者に学習の場を提供した。長成はこの学校で数学を特に重視し、奨励、励行したという[23]。さらに十八年五月、福岡県立英語専修修猷館が発足し、修猷館が再興した。原動力は黒田長溥と金子堅太郎などで、廃藩後に窮状に陥っている士族を前に、衣食を給するよりも学校を作って人材を養成すべきであるという金子などの意見が長溥に採用された結果であった。長溥は黒田家から学校建設資金四万五千円を出し、あとは金子が地元有志と協議して、「藤雲館」の校舎・諸器具を買い受けることで合意に達し、「藤雲館」を廃止して修猷館を再興することとなった。かくして、福岡県立英語専修修猷館は県立でありながら黒田家の出資に依り、将来有為の人材を養成するために英語、西洋の学問を研究するべきであるという長溥の信念が反映された、修業年限三年の専門学校となった。長溥は開館式の祝辞で、「教科ノ如キモ

専ラニ普通ノ英学ヲ教授シ、士農工商ヲ問ハス、一般人民ニ適切ナルモノヲ修習セシメ、以テ筑前四民ノ知識ヲ発達シ、国家開明ノ基本ヲ立シメント欲ス」と述べている。身分の差を超えた英学の教授を目的とした専門学校であった。[24]

修猷館には「勧学生」制度が設けられ、金子堅太郎が学業優秀者に授業料を給与することとなった。筑前の子弟を東京府下牛込築土八幡の筑前寄宿舎に住まわせて、修学させようとする「貸費生」制度も発足し、資金は黒田家が提供した。修猷館は明治二十二年三月、福岡県立尋常中学修猷館として再編され、福岡尋常中学校は廃止され、その生徒を併合することとなった。黒田家は継続して、寄付金を寄せている。かくして二十五年七月、修猷館館長に在京のまま黒田長成が就任し、公使館書記官・今立吐酔が館長代理となった。この年の生徒数は、一年生百九十名、二年生百四名、三年生六十二名、四年生四十二名、五年生十三名を数え、授業は数学、歴史、博物、地理、ことごとく英語の原書を用いたため、生徒は通学中も歩きながら英語の勉強をしたという。長成は二十七年八月まで在任した。[25]

長成館長時代に修猷館の学生だった筑紫昌門（明治二十七年入学）は、当時の教育方針について、英・漢・数（英語、漢学、数学）が基本で、これを徹底的にたたき込むところにあり、英語によって外国の思想事情を研究し、一方で純然たる「国粋主義」を堅持して日本人として完成した人物を作ることにあった、と述べている。試験は厳しく、卒業時には高等師範学校レベルの実力が身についていたという。[26]

修猷館はその後、福岡県中学修猷館、福岡県立中学修猷館、福岡県中学修猷館、福岡県立高等学校修猷館、福岡県立修猷館高等学校などと変遷し、現在にいたっている。[27]

なお、修猷館を支援する団体として明治二十一年に修猷学会が設立され、二十五年から二十六年にかけて、黒田如水・黒田長政を祭る光雲神社、黒田長成とともに福岡城の佐賀堀・中堀を払い下げてくれるよう福岡県に願い出て許可された。堀からの収益を、光雲神社の維持費や尋常中学修猷館の維持費の一部にあてるためであった。二十五年十一月、長成は「従来ノ縁故」によって特別に払い下げてもらい、「福岡尋常中学修猷館維持ノ一分ヲ補フ目的」だと福岡県知事に申請している。明治三十三年から修猷館の経費は全額税金でまかなわれるようになったため、堀からの収益は奨学金などの目的で使われるようになったようである。その後、三十五年から十年間は医科大学の敷地買収のための負担金として使われ、四十五年以降、再び修猷館や

その他の中学校生徒のための奨学基金に盛り込まれることとなった。長成はあくまで修猷館奨学金として収益を用いたかったようで、三十九年五月には福岡県知事に対し、医科大学設置のために用いられる期間が満了後、「修猷館奨学金トシ、同館ニ於テ学術優等将来有望ノ者ニシテ学資ニ乏キモノヘ適宜御補助相成候様致度、此段願奉候也」と申請している。注目されるのは、四十四年の陸軍特別大演習に際して、明治天皇から金二千円が教育資金として下賜され、修猷館奨学金をこれに組み入れたいと県側が申し入れた際、長成が福岡県知事に次のように述べている点である。「恩賜奨学資金ニ合同セシムルハ、聊カ考フル所有之、各別ニ御保管ヲ願度ニ候、其他ハ先年寄附致シタル条件ニ基キ、微意ノ在ル所ヲ永久ニ旧領地教育上ニ及ホサントノ精神ニ出候義ニ付、右ニ御諒知可被成下候」。すなわち長成は、恩賜奨学資金[28]に合同させるのには反対で、修猷館奨学金とは別々に保管したい、それは「微意ノ在ル所」を永久に旧領地の教育上に及ぼそうとするためである、というわけである。天皇の恩資金に組み込まれるのは名誉なはずだが、それにあえて抗する、旧藩主家としての矜恃が垣間見られる発言であった[29]。

三、黒田奨学会

黒田家は、黒田奨学会という育英事業団体を組織し、現在にいたるまで奨学金の給付を行ってきた。設立されたのは大正四年のことで、総裁は黒田長成であり、「黒田奨学会会則」第二条には「本会ハ旧福岡、秋月両藩ノ子弟ノ学芸ヲ奨励シ人材ヲ養成スルヲ目的トス」とあり[30]、昭和四年に財団法人化された。先述の佐賀堀、中堀の売却代金などを原資とする福岡県奨学資金の受け皿として成立したもので、奨学金ははじめ貸費であったようだが、その後給費となり、返還を求めずに育成された学生の能力を社会に還元させることを目指した。収益金を奨学金として運用していた当時は蓮根の栽培で年五百円内外の収入であったものが、堀が埋め立てられたことで、不動産収入が一気に増大し、その収入は六万円に上ることとなった。先述の通り、もともと福岡藩では、黒田長溥の代に、長溥自ら長崎でシーボルトに師事するなど蘭学に強い関心を持ち、藩の子弟の優秀な青年に蘭学を学ばせ、各種の職人にも、海外の技術を習得させるために長崎への留学をさせたといわれている。慶應三年（一八六七）には平賀義質、松平直美、本間英一

郎等を海外に留学させ、黒田長知自身も明治四年に金子堅太郎、團琢磨と共に欧米留学することとなった。奨学生の選抜にあたっては身分や情実ではなく、実力をもって当たることを主眼とし、その精神は今日まで引き継がれている。事務所が置かれていた黒田家別邸（昭和十四年に長成が黒田奨学会に寄付）は太平洋戦争の末期の空襲で焼失したが、その後福岡労働基準局が借り手となり、さらに福岡検察庁・法務局の庁舎が建ち、奨学会と借地契約を結んで借地料を奨学金の資金とすることとなった。昭和五十六年に福岡検察庁が立ち退いて更地になったため、西日本鉄道のバスターミナルとして契約を結び、借地料収入によって会の運営を行うようになる。歴代の総裁には黒田家当主が就き、発足当初は長成、現在は長高氏が務めている。現在まで卒業生は九百名以上となり、弁護士、医師、大学教授、会社事業主、スチュワーデス、外資系企業など、多彩な人材を輩出してきた。当初は旧福岡藩藩士の子弟が対象だったが、現在は地域的な限定はなく、経済的に就学困難な成績優秀者に奨学金を給付している。現在、バスターミナルは駐車場となって、その賃借料をもとに平成二十五年（二〇一三）七月現在で五十六名の奨学生に奨学金を給付している。大正十二年時点で、大学が月額二十五円、高等学校・高等専門学校は二十円が給付されていた。昭和二十年代頃までは、借地料以外にも、株式配当金や国債、社債、寄付金などの収入源があったようであるが、現在は土地収入だけに依っている。[31] 奨学金を給費として貸費としないのは、学業によって得られた知・徳・体の技能と人格を社会に貢献することが返済であるという考えに基づいており、その精神の継承のため、如水公法要行事への参加や、高野山参詣、黒田家墓所への参詣、学生研修会の開催などに取り組んでいる。[32]

陸軍大将の尾野實信が、「黒田家奨学会といふのがあつて、黒田家の基金で貧しい優秀な学生に学費を給費（始めは貸費）されてゐたことは寛く知れわたつてゐることで、侯爵様の育英事業に御熱心であつたことがうかゞはれる」[33] と述べており、黒田奨学会の育英事業は戦前から広く知られていたようである。黒田奨学金で貸費・給費を受けた人々で瑞藤会という組織が結成され、長成もその設立を聞いて大変喜んだという。[34] なお、金子堅太郎は昭和八年の奨学生に対する訓示で、小倉や柳川、久留米などの出身者を入れることに絶対反対であると述べ、「旧君の情誼を以てなすものであって、筑前人でない限り育英の業はせぬのである……将来人の力に依らなければ大家の家政は出来ぬの

である。三百年の君臣の情誼が無ければ何をするにも到底駄目だと言う老公の思召であったのだ」と強調し、「どうか黒田家の学生は旧君臣の情誼を忘れぬ様」と訴えている。[35] 君臣の情誼が薄れつつあった（この点については後述）当時、自ら黒田家の育英事情を支えてきた金子は、強い危機感を感じていたのであろう。

四、福岡への関心と絆

長成は東京に在住し、長く貴族院副議長を務めたが、福岡への関心は薄れなかったようである。中学を卒業する頃から貧しくなり、黒田奨学会からの貸費を受けて大学を卒業したという久世庸夫は、「君恩に次ぐに藩主の恩は私として、また私一家として終生忘れ得ぬ深いものである」と述べている。のちに福岡市長になった際、長成のもとを訪れると、「市政の運用その他いろ〳〵福岡市の問題をお尋ねになり、福岡のことを熱心に研究し、福岡市の事業その他にも興味を持つて、いろいろ質問され、自分の意見を述べられ、随分福岡のためにはお尽しになつたものである」と回顧している。[36] 福岡市政に浅からぬ関心を持っていたのであろう。長成は福岡市博覧会の名誉総裁、市政最高相談役なども務め、福岡市長の畑山四男美は「御指図を仰いだ事は一二に止まらない」と回顧している。[37] 林貢という老人が長成を訪問した際には、黒田家の資産がいくらあるか知らないが、「それをみんな国の育英事業に寄附されて、御自身はミソコシ一つで国にお帰りになつたならば、国の者は涙を流して感泣し、お殿様をミソコシ一つで国に帰しては相済まぬと、寄附された何百万円は直ちに集まつて返つて来るだらう」と話したところ、長成はニコ〳〵しながら「お前の言うことにも一理ある、考へなければならぬことだ」と応じたという。[38] 長成の側近・塚本道遠も、「侯爵は非常に旧藩のことを考へられてゐた。何から何までいろいろ考へられてをられたが、中でも旧藩子弟の教育のことには特に御熱心であつた。これは長溥公以来、代々黒田家は教育に御熱心で、今日各方面に活躍している福岡県の人材は、かゝつて黒田家の教育方針に依つて作られたといつても過言ではないほどであらう」と証言している。[39] こうした関心が、先述のような育英事業につながったわけである。

福岡との縁も浅からず続いた。大正六年十一月十七日、黒田邸で旧筑前藩戊辰戦役忠死者の五十年祭が執り行われ、多数の旧藩士が招待された。その一人であった鷲見剛亮が、この機会に黒田家の旧恩を忘れず、同郷の交誼を深くする

ため、記念の団体を作りたいと提案し、長成はこれに賛同して、長成の留学に同行した元大蔵官僚で貴族院議員の添田壽一、黒田侯爵家記録編集室編集局の中島利一郎、そして鷲見剛亮が会則を作成し、会長に長成を推して、「筑前会」が発足した。[40] 同会は趣意書に「旧藩主黒田家ヲ中心トシ、同郷ノ厚誼友情ヲ温メ、専ラ穏健質実ナル気風ノ涵養ニ力メムトス」[41]とあり、会則案第二条にも「本会ハ黒田家ヲ中心トシテ同郷人ノ交誼友情ヲ深厚ニスルヲ以テ目的トス」とあるように、[42] 筑前出身者で構成され、黒田家に対する尊崇心を高め、同家を中心として旧臣相互の交際を深めることを目的としており、長成はその発会にあたって、「自分が会長に推されました次第で、自分も是れは至極結構なこと、思ひ、快諾して会務を見るやうになつたのであります」と述べている。[43] 逓信大臣の野田卯太郎は、筑前会の取り組みを高く評価し、「今日社会政策が何とか、私も政府に居る一人でありますが、非常に金を掛けてやるより、其效が挙ることは、是ほどのことはない。黒田侯爵家に於て、斯の如き際に、斯の如き御催しを為し下されたことに付ては……内閣大臣の一人として、茲に厚く黒田侯爵に感謝の意を表する次第であります」と評している。[44] 筑前会がいつまで続いたか判然としないが、黒田家を中心とした旧臣の親睦会として存続したようで、第一回総会が東京の黒田邸で大正七年五月十七日に開かれ、[45] 第二回総会が大正八年十二月七日に、[46] 第三回総会が大正九年六月六日に、[47] 第四回総会が大正九年十一月二十一日に、[48] それぞれ開かれている。大正八年十二月七日には筑前会総会で添田壽一が「国際連盟と個人的反省」と題して、また中野正剛が「世界の変局に際して」と題して講演会を催した。[49][50] 大正十四年十一月十五日には、長成の枢密顧問官親任を祝賀するため、黒田邸で祝賀会を兼ねた観楓会が催され、長成以下、添田壽一、内田良平、頭山満、栗野慎一郎などが出席し、黒田に記念品を贈呈、仮装行列や手品、琵琶などの芸が披露されている。[51][52] 筑前会のイベントは「在京旧筑前藩関係の唯一の楽しみたる黒田家の年中行事」だったようだが、費用面で不足があると長成がポケットマネーで補助したという。日中戦争や長成の病気で、長成の晩年には開かれなくなったようである。[53]

五、むすびに代えて——報古会と旧臣の再編成

このほか、旧藩士が旧藩主と旧交をあたためるための、「報古会」という団体もあった。[54] 廃藩置県後、黒田家が東

京に移住し、旧福岡藩士の多くも福岡から離れ、郷里との縁が薄くなっていった。そんななか、旧藩士間の連携を密にし、福岡発展の基礎を築いた黒田家に報いるべきであるとして、明治二十四年に発足したものである。初代会長には、「報古会」結成運動の中心的人物であった山中立木（初代福岡市長、黒田家家令）が就いている。参加者は三千名に及び、黒田家を顕彰するさまざまな行事に取り組んだ。太平洋戦争が激化すると活動は一時中断となり、福岡大空襲で記録や写真なども失ってしまった。戦後、旧秋月藩主家の黒田長敬が中心となって、休止していた「報古会」を「藤香会」と改称して活動を再出発させることとなり、黒田如水、長政の法要をはじめ、歴史遺産の保存・継承活動を続けてきた。最近でも、平成九年には黒田家発祥の地・滋賀県木之本町において、木之本町、長船町、姫路市、中津市、福岡市の首長などが集まる「黒田サミット」を開催、平成十一年には崇福寺の黒田家墓所への参詣者の利便をはかるため、福岡市の援助を得て潜り門を設け、名誉顧問の黒田長久（当時の黒田家当主）によって「藤水門」と名付けられた。平成十五年にも福岡国際会議場で黒田サミットが開催されている。平成十七年には地震で黒田家墓所が大被害を受けたため、藤香会が復旧工事にあたり、翌年には完成記念式典が催されている。平成二十年にも黒田サミットが姫路市市民会館で開催された[55]。こうして危機の時代を経ながらも、黒田家と福岡・旧臣の絆は現在まで継承されてきているのである。

なお、右の山中立木は、黒田家の維持・発展と旧藩士とのつながりを保持するために尽力した人物であった。筑前会の発足に際し長成が会長を引き受けてくれたことに、「一同大ニ満足ヲ表シタル次第」だと述べ、「旧君臣ノ情誼親密ナルハ御家門ノ美事」であり、対外的危機が発生した際には一致して「君国」のため尽力すると記している[56]。近世的紐帯を近代的義務に接続しようとした試みであった。陸海軍士官養成を支援する「筑前郷友会」なる組織もあったようであり、山中はその成果を期待する文章を遺している[57]。山中は長成に当主としての姿勢を糺す役割も担っており、大正期には家令や家扶に対して直接面会して指示を出さず給仕に取り次がせており、趣旨が徹底せず誤解が生じるとして、このままでは「忠誠ノ精神モ自然冷却スルナラン」と苦言を呈している[58]。貴族院副議長の重職にありながら「政治上ノ事等研究」することなく、何か問題が発生しても「只タ人ニ意見ヲ」頼っているとも批判している[59]。この時期になると、近世的君臣意識が希薄化し、意識的に君

臣の情誼を構築していかなければならなくなっていたのであろう。そのための諫言であり、筑前会や報古会であった。

近年、近代における旧藩主家と地域社会との関係を分析する研究が目立ってきている。[60] 旧福岡藩黒田家も、その事例としてふさわしいものといえよう。

（1） 藤井甚太郎「侯爵黒田長成閣下の御誕生」（『筑紫史談』第八八集、昭和一九年九月）、五頁。

（2） 藤井甚太郎「黒田長成公御幼時東京御移住」（『筑紫史談』第八九集、昭和二〇年一月）、二頁。

（3） 慶應義塾一五〇年史資料集編集委員会編『慶應義塾一五〇年史資料集1　基礎資料編：塾員塾生資料集成』（慶應義塾、平成二四年）、二四八頁。

（4） 貴族院議員としての長成については、藤井甚太郎「黒田長成公と第三回帝国議会（一）（二）」（『筑紫史談』第八七・八八集、昭和一九年四月・九月）、など参照。

（5） 田宮昭子「黒田長成」（小川原正道研究会編『慶應義塾出身貴族院議員列伝』慶應義塾大学法学部政治学科小川原正道研究会、平成二〇年）、四一頁。

（6） 「旧福岡藩主侯爵黒田長成」（『九州の現在及将来』実業之世界社、大正五年二月）、七五七頁。

（7） 以上、松原嶤「少年時代の黒田長成公」（『福岡県人』第一七巻一〇号、昭和一四年一〇月）、一二頁。引用文中の（中略）（後略）は原文のママ。於順様とは長成の妹・順子のことである。

（8） 大熊淺次郎「故黒田長成公の幼時の学問旧領地西下の数々を偲ぶ」（前掲『福岡県人』）、三六頁。

（9） 前掲『慶應義塾一五〇年史資料集1　基礎資料編：塾員塾生資料集成』、二四八頁。

（10） 「慶應義塾学業勤惰表」（慶應義塾福澤研究センター編「マイクロフィルム版福澤関係文書」R1-A-36-01、37-01、38-01、所収）。

（11） 高橋暢彦編『金子堅太郎自叙伝』第一（日本大学精神文化研究所、平成一五年）、一三一頁。これにより、「従来は毎週老公（長溥―引用者）を訪問し、当時、教育を担当しゐたる長成君の成績緒を報告に来り居りし福澤は、これ以降は黒田家へ全く出入しなくなりたりき」と金子は回顧している（同、一三一頁）。

（12） 前掲「故黒田長成公の幼時の学問旧領地西下の数々を偲ぶ」、三六頁。

（13） 「御略歴」（前掲『福岡県人』）、二頁、前掲「少年時代の黒田長成公」、一三頁。

（14） 前掲「黒田長成」、四一―四五頁。

（15） 野中到「噫故侯爵黒田長成公」（前掲『福岡県人』）、一五頁。

（16） 金子堅太郎「故黒田侯爵の思ひ出」（前掲『福岡県

人』）、四頁。前掲『金子堅太郎自叙伝』第一集（一三二頁）でもほぼ同様の回想がされているが、そこでは慶應義塾が「普通中学の程度」で「専門の学科」を教授することなく、英語も日本人が「変則」の英語を教えているため「発音読方等は不完全」であると批判している点は注目される。

(17) 小山騰『破天荒〈明治留学生〉列伝』（講談社選書メチエ、平成一一年）、九三―九四頁。

(18) 前掲『破天荒〈明治留学生〉列伝』、一五二頁。

(19) 前掲「黒田長成」、四一頁。

(20) 石瀧豊美『黒田奨学会の歩み―一〇〇年史』（公益財団法人黒田奨学会、平成二七年）、一―二頁。

(21) 前掲『黒田奨学会の歩み―一〇〇年史』、三七頁。

(22) 前掲『黒田奨学会の歩み―一〇〇年史』、三四頁。

(23) 塚本道遠「側近に侍して」（前掲『福岡県人』）、二六―二七頁。

(24) 修猷館二〇〇年史編集委員会編『修猷館二〇〇年史』（修猷館二〇〇年記念事業委員会、昭和六〇年）、五七―七九頁。

(25) 前掲『修猷館二〇〇年史』、八七―一一四頁。

(26) 筑紫昌門「政治家・教育家・詩人」（前掲『福岡県人』）、二三―二四頁。

(27) 前掲『修猷館二〇〇年史』、七〇八―七九八頁。明治三三年に黒田家からの出資は終了し、純然たる県立中学校となった（福岡県立修猷館高等学校ホームページ：http://shuyu.fku.ed.jp/html/、平成二八年四月二二日アクセス）。

(28) 恩賜奨学資金は福岡県立図書館基本財産に組み込まれ、結局、奨学生に給付されることなく姿を消したという（前掲『黒田奨学会の歩み―一〇〇年史』、九一頁）。

(29) 太田暁子「資料紹介　福岡城佐賀堀中堀関係文書」（『福岡市立博物館研究紀要』第一二号、平成一四年三月）、一―二〇頁。

(30) 「黒田奨学会会則」（『筑前』第一号、大正九年一一月）、一六三頁。

(31) 前掲『黒田奨学会の歩み―一〇〇年史』、九二―一二二頁、同巻末別紙「昭和一三年度財団法人黒田奨学会歳入歳出決算書」、各務章「（財）黒田奨学会の事業について」（『大学と学生』第三〇八号、平成三年六月）、二二―二六頁、拙著『福澤諭吉の政治思想』（慶應義塾大学出版会、平成二四年）、一七五―一七六頁、伊達健太郎「黒田奨学会の哲学―創立一〇〇周年を迎えるに当たって」（黒田奨学会編『創立一〇〇周年記念誌』黒田奨学会、平成二七年）、六頁、「黒田奨学会の沿革と現状」（前掲『創立一〇〇周年記念誌』）、九二頁、「（財）黒田奨学会　年表・資料集」（『財団法人黒田奨学会創立八〇周年記念瑞藤会会報集』財団法人黒田奨学会、平成七年）、公益財団法人黒田

奨学会ホームページ（http://kuroda-s.com、平成二八年四月二〇日アクセス）。
(32) 各務章「報恩感謝の毎日でありたい」（『瑞藤会会報』第六二号、平成一九年五月三〇日）、一頁。
(33) 尾野實信「長成公の御人格」（前掲『福岡県人』）、一四頁。
(34) 前掲「側近に侍して」、二八頁。
(35) 「昭和八年六月における瑞藤会の訓示」（『瑞藤会会報』第一号、昭和五一年五月一日）、二頁。
(36) 久世庸夫「大正天皇御即位当時の憶ひ出その他」（前掲『福岡県人』）、一九―二一頁。
(37) 畑山四男美「追悼」（前掲『福岡県人』）、四九頁。
(38) 前掲「政治家・教育家・詩人」、二四―二五頁。
(39) 前掲「側近に侍して」、二六頁。
(40) 鷲見剛亮「逝ける黒田長成公を偲ぶ」（前掲『福岡県人』）、四四頁。
(41) 「筑前会趣意書」（『筑前』第一号、大正九年一一月）、一頁。
(42) 「筑前会会則」（『筑前』第一号、大正九年一一月）、二頁。なお、「山中立木資料」（福岡市総合図書館寄託）に「（仮）筑前会趣意書草案、同会則草案」が含まれている。
(43) 黒田長成「筑前会発会式に当りて」（『筑前』第一号、大正九年一一月）、一頁。
(44) 野田卯太郎「全国嚆矢とも謂ふべき試み」（『筑前』第二号、大正一〇年六月）、六頁。
(45) 「筑前会第一回総会記事」（『筑前』第一号、大正九年一一月）、一三一―一三四頁。
(46) 「筑前会第二回総会記事」（『筑前』第一号、大正九年一一月）、一三四―一三五頁。
(47) 「筑前会第三回総会記事」（『筑前』第一号、大正九年一一月）、一三五―一四一頁。
(48) 「筑前会第四回総会記事」（『筑前』第二号、大正一〇年六月）、九〇―九六頁。
(49) 添田壽一「国際連盟と個人的反省」（『筑前』第一号、大正九年一一月）、三一―三六頁。
(50) 中野正剛「世界の変局に際して」（『筑前』第一号、大正九年一一月）、三七―四三頁。
(51) 『読売新聞』大正一四年一一月一六日付朝刊。
(52) 前掲『福澤諭吉の政治思想』、一七七―一七八、二〇〇頁。
(53) 前掲「側近に侍して」、二八―二九頁。
(54) 前掲「大正天皇御即位当時の憶ひ出その他」、二一頁。
(55) 「藤香会の沿革（略記）」（如水興産株式会社提供）。
(56) 「（仮）旧藩士民待遇上ニ付意見申上候（控）」（「山中立木資料」福岡市総合図書館寄託）。
(57) 「（仮）書簡控」（「山中立木資料」福岡市総合図書館寄

託）。

(58) 「（仮）意見案」（「山中立木資料」福岡市総合図書館寄託）。

(59) 「（仮）案」（「山中立木資料」福岡市総合図書館寄託）。

(60) 例えば、内山一幸『明治期の旧藩主家と社会―華士族と地方の近代』（吉川弘文館、平成二七年）、「特集　大名華族と旧藩意識」（『九州史学』第一五九号、平成二三年九月）、など、参照。

追記　本稿は、平成二十八年度・二十九年度慶應義塾学事振興資金の補助を受けて作成されたものである。